

## 修了生代表

教育学研究科 教育科学専攻

はし もと けん と  
橋 本 憲 人



はじめに、この度の新型コロナウイルス感染症により尊い命を失われた方々に修了生一同、深く哀悼の意を表しますとともに、世界規模で拡大する感染症の一刻も早い終息と感染された方々の早期回復を心よりお祈り申し上げます。

また、本学でも新型コロナウイルス感染症が国内で広がっている現状に鑑み、令和元年度学位記等授与式が中止となりましたが、今ここで、私たちを導き支えてくださいました全ての方々へ心から感謝申し上げます。

本日をもちまして、私たちは岡山大学大学院の全課程を修了いたします。大学院入学以来、各々の研究科において、変化の激しい現代社会における地域規模から世界規模の課題に柔軟に対応できる、豊かな学識と高度な課題解決能力を備えた人材を育成するという教育方針のもと、先生方のご指導を賜りながら、研究に励んでまいりました。

私が所属した教育学研究科教育科学専攻では、教育に関する様々な事象を教育科学として開拓的に広く捉え、実証的・体系的に研究し、広い視野で国際的・地球規模の課題を解決することのできる地球市民の育成を目標としており、「教育で世界を拓く」ために絶えず研究と修養を重ねてまいりました。

私が大学院に入学した2018年からの2年間を振り返ると、実に

多様な社会の変化がありました。なかでも、2018年の西日本豪雨で岡山が甚大な被害を受け、多くの方が亡くなったことは忘れることのない出来事であり、社会に大きな影響を与えると同時に、現代社会の、そしてその社会を生きる私たちの課題を浮き彫りにするものでした。課題の中でも、とりわけ重要なものとして「地域共同体の弱体化」と「多文化共生」が挙げられるのではないかと考えております。例えば、倉敷市真備町では、犠牲になった人々のうち高齢者・障害者が8割を超えました。地域共同体では、様々な活動が展開されてきたにもかかわらず、災害が発生するとその被害が集中するのは配慮や支援が必要であった人々でした。その背景には、少子高齢化や過疎化などによる地域共同体の弱体化に伴う共助の紐帯の形骸化があるかと思えます。同様に、災害弱者となりがちな外国人住民への情報提供の困難さは、言語や価値観を越えて多文化共生社会を実現していくことの難しさとその重要性を再認識させるものでした。私はその2点を熟考する機会を大学院でいただきました。

授業の一環として取り組んだPBL (Project Based Learning) では、地域共同体の紐帯の再構築に焦点を当てた研究に取り組み、何度も地域に足を運び、その地域の人々との関係を築き、実情を踏まえながら、地域住民主体でその紐帯をどのように再構築していくのかを日々議論してまいりました。異なる専門性を持つチームメイトと励まし合い、時には忌憚のない意見を交えながら、試行錯誤というよりむしろ悪戦苦闘しながらも充実した研究生活を送るなかで改めて気づいたことがあります。それは、社会をよりよくするためには、個々人の力では限界があり、多様な人々との協働が不可欠であるということです。また、本専攻には私を含め、他大学・他学部か

らの進学者、留学生が多数を占めていたことから、多様な背景や価値観を持つ人々との関わり合いのなかで切磋琢磨できる環境にありました。そのため、知見を広げながら、他者の文脈を踏まえ、その価値観を尊重しつつ協働していく姿勢を養うことができたことは「教育で世界を拓く」人材としての大きな糧となると確信しております。

そのように、私たちは現代社会を多様な視点から捉え、異なる社会文化的背景を持つ人々と進んで連携していきながら、その専門性と実践力を磨くことのできる恵まれた環境の中で研究に従事させていただきました。そして、多くの先生方、諸先輩方にご指導いただいたことはたいへん貴重な財産となりました。

本日、大学院の各課程を修了する私たちは、多くの仲間とともに社会へ巣立ってきます。私のように、広い視野から教育を捉え実践をしていく教師として、あるいは企業やNPO職員などの様々なキャリアを通して、岡山大学大学院で培われた専門性や実践力をそれぞれの場所で、それぞれの形で発揮していくことで、よりよい社会の実現に貢献するとともに、さらなる研究と修養に努めてまいります。

そして、最後になりますが、私たちに大学院での勉学の機会を与えてくださり、ご支援をいただきましたすべての皆さまと、ご指導くださった槇野学長をはじめとする諸先生方、職員の皆さま方に、修了生一同、心より御礼申し上げますとともに、岡山大学大学院のさらなる発展を祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。

令和2年3月25日

修了生代表 教育学研究科 橋本憲人